

《書評》

棚沢永子著

『現代詩ラ・メールがあった頃 1983.7.1-1993.4.1』

平澤 信 一

《今から40年前、ふたりの女性詩人が男性主導の文芸シーンに一石を投じるべく立ち上がった。新川和江・吉原幸子責任編集『現代詩ラ・メール』である》と帯にはある。『現代詩ラ・メール』は、1983年7月に創刊。創刊当初の発行は思潮社で、発行人は思潮社社主の小田久郎。1988年7月発行の第21号から経営的に独立し、新川・吉原両氏が発行人も兼ね、発行が書肆水族館＝現代詩ラ・メールの会となる。1993年4月の終刊まで、季刊で全40冊を発行。タイトルのLa Merは、フランス語で海を意味する女性名詞。女性による、女性のための、初の商業詩誌であった。創刊号の編集後記には「あらゆる生命の起源である海、その海をひとつずつ抱え持つ存在である女たちの詩誌——という意味をこめて命名した」とする新川和江の言葉があり、両名による創刊挨拶には「私たちは、この国の“女流”の古く輝かしい伝統をふたたび大きく開花させ、新しい歴史の流れに手を添えるため、詩を愛する女性たちにより広い活動と吸収の場を用意したいと考えました。真に女を反映し、真に女に求められる詩の世界を確立し、その上で、男性にも女性の本質を正當に理解されたいと思うのです」とある。本書は、大学を卒業後、思潮社に入社して、すぐに『現代詩ラ・メール』の担当となり、約10年にわたって、この詩誌の編集を支え続けた棚沢永子(当時・荒井永子)による貴重な回顧録である。

『現代詩ラ・メール』は、10人の新人賞受賞詩人を輩出したが、第一回新人賞の鈴木ユリイカ(のちにH氏賞、詩歌文学館賞、現代詩人賞を受賞)が、同誌の創刊以前から新川の目に留まり、投稿を待望されていたことや、第二回新人賞の中本道代(のちに丸山豊記念現代詩賞、萩原朔太郎賞を受賞)が、ほとんど初対面の新川に直接、詩ノートを手渡し、それを読んでもらっていたことなどが明かされている(中本は「いま考えると、思い切ったことをした」と回想している)。第三回新人賞の笠間由紀子が初めて掲載された詩の原稿が横書きだったというのも、笠間由紀子らしくて、たいへん微笑ましい。第20号の特集〈手紙詩〉での笠間の作品「朝に切手を貼って」への辻征夫の返詩「その赤いポストの中」も本書には引用されているが、ここで紹介しておく、

ポストの中できみの詩を読み、それから手紙の/サローヤンの一節を読んで泣いちゃった。「人間というものは/ほんとうは喜ぶ動物であり、その喜びをわけあい/その喜びをひとに伝えたがっている動物である」

このサローヤンの一節を、笠間は繰り返し引用しているが、評者も、この一節を読んで心から教えられた者の一人である。『現代詩ラ・メール』を読んで教わった、とても大切な

ことのひとつが、この言葉であると今も考えている。

第六回新人賞の小池昌代(のちに現代詩花椿賞、高見順賞、萩原朔太郎賞、川端康成文学賞を受賞)、第七回新人賞の岬多可子(のちに高見順賞、小野市詩歌文学賞、大岡信賞を受賞)の活躍は、言うまでもないだろう。他の受賞者たちも、それぞれの場所で、いまでも仕事を続けている。

『現代詩ラ・メール』の特色として、詩歴の長い新川が、幅広い目配りで女性詩の系譜作りを試み、カリスマ的人気を持つ吉原が、他ジャンルで活躍する女性作家と対談するという企画があった。その女性詩採掘の欄である「女性詩人この百年」の第一回が左川ちか(小松瑛子執筆)であったということも象徴的だろう。左川は最近(2022.4)ようやく、全集が刊行されたが、評者が本書の著者である棚沢永子にメールを送った際、「いま『左川ちか全集』の校了間際で、まともな返信ができません。」と返事をもらったことがある。連載は、高群逸枝、森美千代、米澤順子、深尾須磨子、林芙美子らへと続いてゆくが、1983年12月14日付けの朝日新聞の記事「よみがえる幻の童謡詩人—金子みすゞ」の切り抜きを新川和江が持ち込んで、編集部で回し読みをした記憶もあるという。最終回は「『青踏』の女性詩人たち」(高良留美子執筆)。永瀬清子の「降りつむ」から始まる第31号〈資料・女性詩の中の戦後〉には、棚沢永子と山本楡美子による日本初の女性詩集年表も掲載された。

16号で一度、編集から離れた棚沢を再び誘い入れた新川和江の言葉も印象的である。子どもができたという棚沢に対し、新川は「女の人が作る雑誌なんだから、きっとなんとかなるわよ。赤ちゃんが生まれるなんて、私たちもこんな楽しみなことはありません。みんなで子どもを育てましょう!」と説得したという。

『現代詩ラ・メール』は、第17号から、編集委員体制に入る。白石かずこ、新藤涼子、小柳玲子、井坂洋子(第21号からは高橋順子)、鈴木ユリイカである。吉原が病に倒れ、終刊の「ご挨拶」は、新川和江が書いた。本書には、創刊号から、順を追って、その内容と思い出が綴られている。投稿欄であるハーバーライト欄を、二人は、下読みを置かず全ての作品に目を通したという。女性のみを選者によって、男性目線からは零れ落ちてしまう多様な作品が数多く掲載された。

本書に書かれていないことも、いくつか補っておきたい。吉原が「悔しいけど、結局創刊号では谷川さんの作品を超えるものは一つもなかったわね」と言ったことについて。評者は吉原から、『現代詩ラ・メール』を創刊した際、谷川俊太郎に「一生のお願い 電話待つ 吉原幸子」と電報を打った話を聞いたことがある。谷川は、その吉原の願いに真摯に応えたのだろう。その作品も引用されている。(ちなみに御子息・純さんの教示に拠れば吉原が室生犀星賞を受賞した時に受け取った4本の祝電のうちの1本が谷川からだだったという。)

また、本書は、吉原と小田久郎との創刊の話し合いから書き出されているが、その前に草野心平とのエピソードがあったことも重要だろう。これは図版として収録された『図書新聞』1983年7月2日号に一部言及があるが、吉原は、自身が所属する同人誌『歷程』が主宰する歷程賞の選考委員に、なぜ女性がいないのか草野心平に尋ねたことがあったという。そのとき草野は「女はバカだからなあ」と笑い、吉原も周りの者といっしょに笑ったのだった。しかし、しばらくして、「いや、違う。心平さんのことは大好きだけど、いくら心平さんが言ったことでも許せない」と考え直したのだと言っていた。『現代詩ラ・メー

ル』に、草野心平の執筆は一度きりだが、吉原が自宅を改築して開設したポエトリースペース水族館には、草野の書が飾られていた（ラ・メール新人賞受賞詩人たちの座談会の写真に写っている）。また、棚沢は、病に侵されつつあった吉原から同じ編集後記を二度渡されて、『現代詩ラ・メール』の終わりを実感したと言うが、吉原も晩年の草野心平から二度同じ内容のハガキを受け取ったと、淋しそうに語っていた。

最後にもうひとつ。評者は『展望現代の詩歌』『現代詩大事典』『増補改訂デジタル版日本近代文学大事典』で吉原幸子の項目を担当したが、詩の流れだけを辿ると、吉原が晩年に「傷口は光る」（「発光」）と知ったことで、痛ましいそれまでの人生が報われたかのように思えてしまうのだが、この詩を書いてから更に十年、病魔との戦いが待っていたことを、本書を通じて、改めて感じさせられたことを付け加えておきたい。

\* 谷川さんの電報のデータをお送り下さった吉原純さんと、この記事の内容を谷川さんご自身に確認下さった谷川俊太郎事務所の川口恵子さんに、この場をお借りして、お礼申し上げます。

(2023年8月31日 書肆侃侃房 256頁 2,000円+税)